

# 長崎における被差別部落強制移住の諸情況

——部落教育史基礎論のために—— その一

増 田 史 郎 亮

## Compulsory Removal of the Lowest Class People, Etta at Nagasaki

——A. Fundamental Study of the History of  
Dowa Education—— (1)

by

Shirosuke MASUDA

### はじめに

本稿で長崎と言うのは主として直轄領長崎を指し、被差別部落と言うのは、えた（えつた）と呼ばれた人々のそれを指している。長崎で被差別者と言えば、このほかに非人身分（節季候、大黒舞、ヤアラヤアラなど）<sup>1)</sup>、遊女屋、遊女、乞食（物類称呼によれば、ぼん蔵、山ぼん。磯本恒信氏によれば、山番はまた部落の人々の仕事）<sup>2)</sup>、混血児などの人々があり、本稿に必要な限り、それらの人々にも触れる積りであるが、この稿では主として、えた身分の人々について述べる事としたい。なお、被差別者と言えば、後述の如く後年に至り「準賤民の扱いをうけ迫害された切支丹」<sup>3)</sup>もその例外ではないが、この人々についても本稿該当部分で略述する予定である。

なお、筆者は昨年発足した長崎県部落史研究所の所員となり、同研究所が本年10月発刊した『ながさき 部落解放研究』創刊号に本稿と同題目の一文を寄稿したが、本論文では図版を増載した以外は殆んどそれに依っている。本稿では、言わば其の旧稿をふくらませて発表する予定であったが、健康や身辺の事情などで果せなかった。また本稿は筆者の近い将来における部落（解放）教育史構築のための基礎論の微意を含んでいて、副題にはその意を表わした積りである。本文に入るに当って以上の事を断って置きたい。

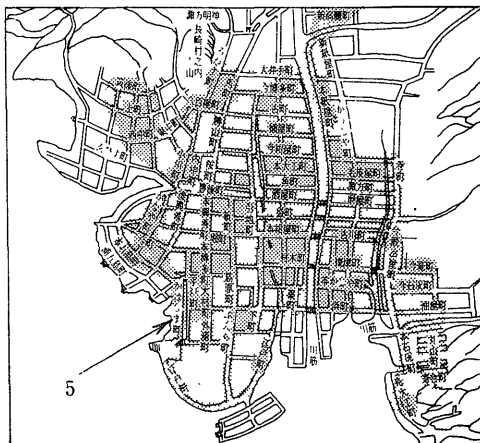
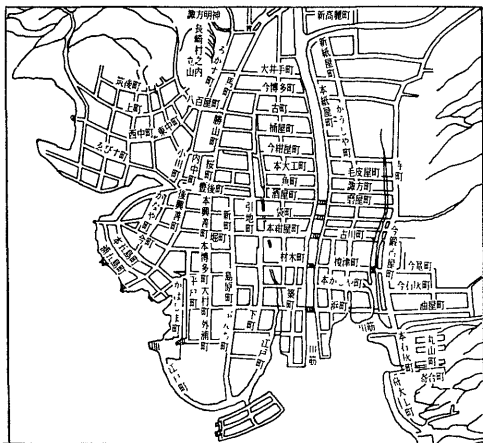
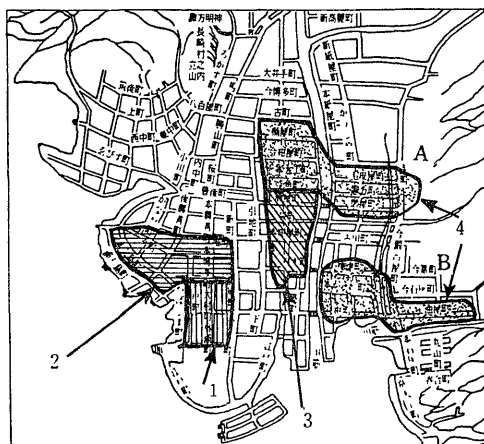
なおまた、部落解放同盟長崎県連合会委員長磯本恒信氏の論文に『長崎県の被差別部落史と現況』、『長崎の風土と被差別部落史祖考』などがあるが、これら（以下磯本氏論文と呼ぶ）は本県最初の注目すべき県被差別部落史研究物であり、筆者は本稿執筆の際、それに多大の啓発を受け、参照・引用する所も多かった。謝意を表すると共に、これも併せて断って置く。

—

磯本氏の前掲論文によれば天領・長崎における部落形成は慶長3（1598）年に始まった由である。慶長3年と言え、豊臣秀吉死去の年であり、徳川家康が政權の座につく5年前に

当り、長崎では秀吉が切支丹領を没収し公領として10年目を迎え、奉行・寺沢志摩守らの努力によって盛んに町作りが行われて「慶長二年ノ頃ニ至リテハ既設ノ二六街皆人家ヲ以テ充填セラレ寸余ノ空地ヲモ見ルコト能ハザルニ至リシカバ、漸以世ヲ拡張シテ……」<sup>4)</sup> という迄になり、同年には油屋町、本鍛冶屋町、皮田町、歌舞伎町、本籠町、新大工町、浜ノ町、磨屋町、毛皮屋町、桶屋町、魚屋町、酒屋町、袋町、材木町、八百屋町、太夫町など職種名を付した町作りが行なわれたという<sup>5)</sup>。この皮田町、毛皮屋町が長崎における部落の基盤となるのである。

以上の事を視覚的に具体化し、考えるため、ここで関係図を掲げておこう。寛永ころ(1624~1642年)の長崎の古地図が図一(上)(長崎県立美術館・図書館所蔵)、それに基づいて作成された地図が図一(下)(アビラ・ヒロシ、「日本王国記」、佐久間正・会田由訳、岩波書店刊、4~8頁参照複写)であるが、図二は以上の図一(下)に基づいて、町建ての様相を一目瞭然たらしめたるために作成したものである。1は元亀2(1571)年、2は文禄元(1592)年、3は慶長2(1597)年、4は慶長3(1598)年、5は寛永18(1641)年の



図一

図二

町建の概要を示したものである。これは、飽く迄、概要であり、必ずしも正確ではないが、この略図からも、長崎の町が1から出発して、2→3と拡がり、更に4A、Bに拡張し、5に至っているという様相は察せられると思う。皮田町は原図「図一（上）」にもなく書いてないので当然、図一（下）にも書いてないが、大音寺、皓台寺境内という事であるので寺町の右側の図二の4Aの右端の部分にあるように書いた。こうして見てみると、皮田町、毛皮屋町共に端近くで、水の便があり、また寺々の近くであった事も看得されようか。なお、町の広がりを示す1、2、3、4A、4B、5の正確な囲みは他日を期したい。

磯本氏によれば、同年長崎市内に散在する職人や博多、大村、平戸、佐賀、唐津などから武具生産職人を現在の大音寺、皓台寺境内に集めて「皮田町」と名付けて、弓、矢、太鼓、鎧を作らせ、また輸入原皮を扱わせるために今の新橋町に「毛皮屋町」が設けられた<sup>6)</sup>。

戦国大名や城下町の一部でも武器の需要、延いては武具の材料としての皮革の需要という軍事的必要から斃牛馬を処理し、皮革の業に従事する人達を極めて必要とし、招聘・保護し、またはその移動を禁止する動きを示した向きがあるが（信州や駿河地方の如きがそれであり、かつて江戸・大阪に皮屋町という町名があり、広島にも同じ町名が残されているのもその例であろう<sup>7)</sup>、直轄地の当地奉行とても然りで、中央政府の武具生産地が必要であったし、鎖国時代以来の開港地という土地柄であれば当然の事（海外革製品の渡来は天文年間以来で、その渡来品は国産品より優秀で伝革として大いに珍重された。）輸入原皮を扱わせるという当地特有の必要性もあった（慶長3年より30数年後の寛永年間の鎖国が当地のみならず日本貿易に与えた影響が甚大であった事は贅言を要しまい。短言すれば、寛永年間の鎖国はそれ迄の貿易関係を長崎一港で、長崎奉行を通じ幕府のみが中国・オランダ両国人を相手に行うという関係に変えてしまったのである。）

江戸時代を通じて、皮革業の中心は何と言っても摂津の渡辺村と播州の高木村であったが<sup>8)</sup>、この渡辺村では元和（1615～1623）以来、長崎毛皮屋町へ唐物皮を仕入れに来る大間屋<sup>9)</sup>が12軒生まれ、時人はこれを長崎問屋と称したと言う<sup>10)</sup>。岸部屋三右衛門、河内屋吉兵衛、大和屋四郎兵衛、明石屋助右衛門、備中屋吉左衛門、日向屋仁右衛門、住吉屋支宗兵衛、豊後屋太右衛門、淡路屋孫右衛門、讃岐屋治兵衛、大和屋弥四郎、池田屋七郎衛門がそれであった<sup>11)</sup>。毛皮屋町で買付けた獣皮のうち、鹿皮を除く原皮の殆んどは渡辺村のこれ等商人達が引受け、江戸をはじめ諸国に売り捌かれた<sup>12)</sup>。一方、長崎の舶来革を利用した袋物などの革細工物は特に江戸の名物として全国に名高かったが、その江戸の有名な袋物商村山善兵衛（現在の太田屋）は代々長崎奉行と関係を持ち、長崎輸入革の取扱いの特権を幕府から与えられて居り、舶来革で江戸に来るものは殆ど彼の手を通じて移入されたと言われた程であった<sup>13)</sup>。これらは長崎毛皮屋町の重みの一端を知らしめる材料となろうか。なお、後の部落も含め、皮田町に関しては、後年、長崎出身の画家によって残された絵図を以て、それを偲ぶよすがの一つとしてよかろうか。図三の川原慶賀の皮細工の道具の絵図がそれである。筆者は長崎県立美術館の本年開催された「川原慶賀展」でこれらの絵図を見た。因みに慶賀は天明6（1786）年？に生まれ、万延、文久頃（1861～65）年？没したと言われる<sup>14)</sup>。

因みに、図四は『人倫訓蒙図彙』<sup>15)</sup>から抜萃した「植虎革師」と「節季候」の図であり、同上書の説明によると、植虎革師は「虎の皮を似造るなり。鳥丸通二条の北にあり。」とあり、節季候は「都鄙にあり。都にては一二月二十日より出る。節季にて候へば、来るとしの

福と、又年の終まで何事もなく送り重ねしを祝ふ心なるべし。」とある。植虎革師の絵図は筆者が『皮革産業沿革史』や『和漢三才図絵』や『日本風俗史』類書で被差別者えたの図絵として紹介されているのと大同小異であり、節季候の説明も亦、『長崎市史・風俗篇』のそれと同巧異曲である事を言い添えて置く。同上書図集には革師・滑革師などの説明はあるが絵図はない。とも角、これらからでも想見されようか。

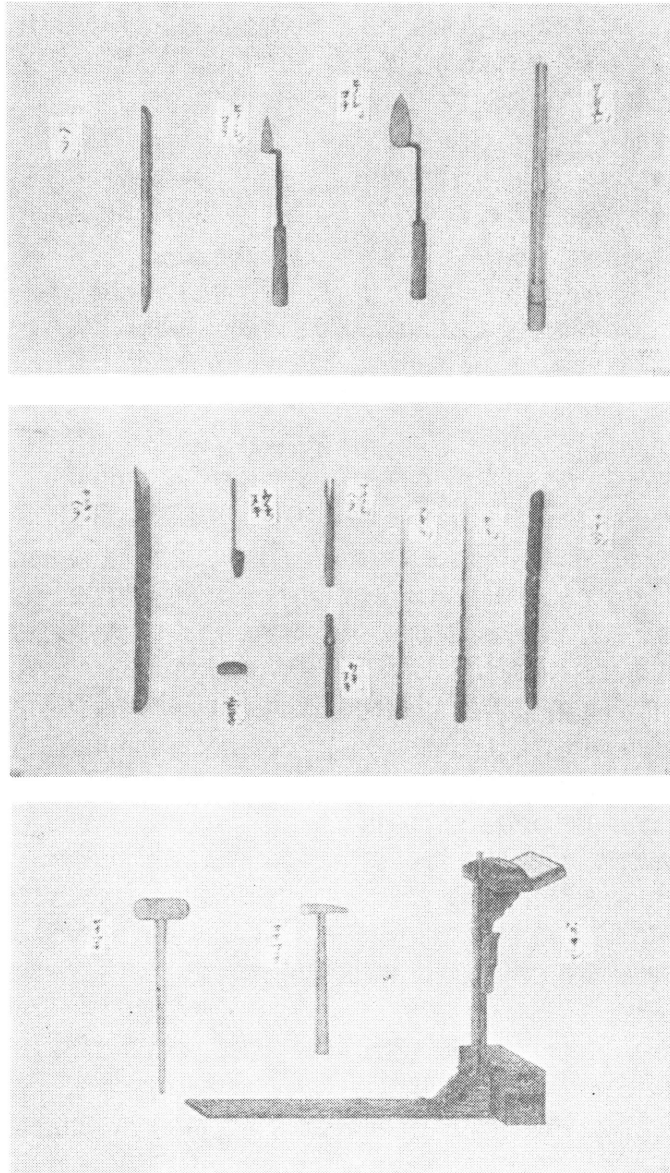


図 三

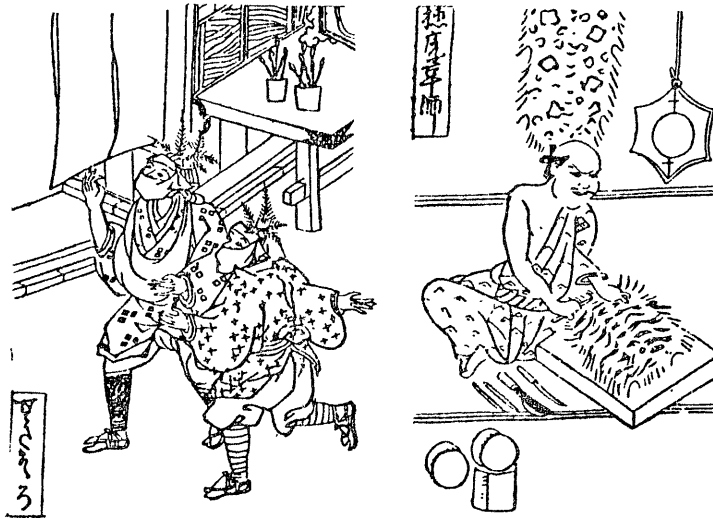
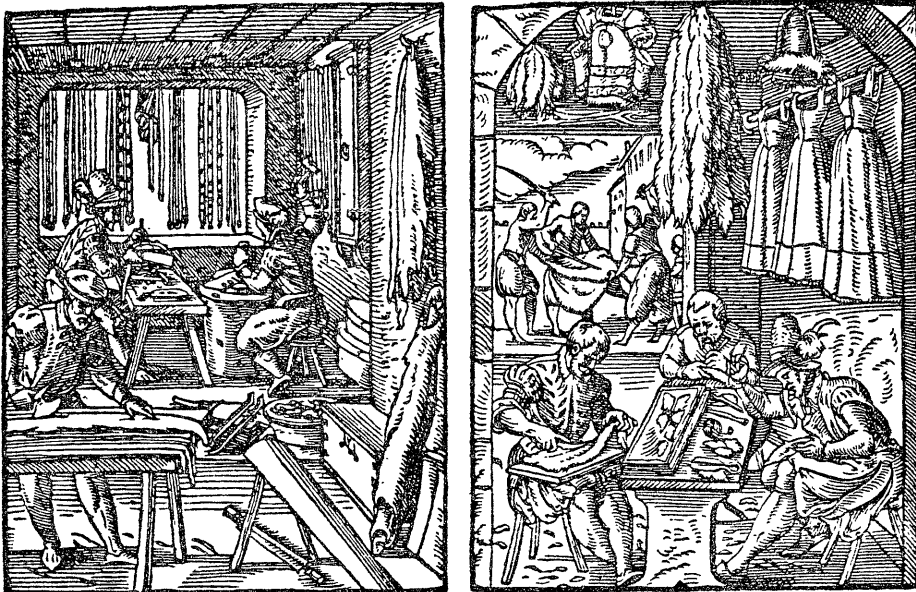


図 四



皮細工師

図 五

毛皮職人

わしは皮の細工師じゃ  
 セム皮、エジプト皮、ロシア皮いろいろ  
 だが、牛、豚、鹿や羊の皮じゃ  
 まずはけものの皮をたくみにはがし  
 石灰汁につけて毛をとり  
 なめし、もんでやわらかくし  
 広くも せまくも、いろいろにのぼす  
 焼き印模様つけの男ベルトは得意の品じゃ

テン、黒テン、リス、山猫、  
 山イタチ、狼、狐、山羊  
 その他異国のけだものの  
 脇腹、背、首や爪さきを  
 みごとに切って、長い短い上衣  
 胸衣、頭巾やひもにし、裏地をつける  
 毛皮職のこのわしに金おしまぬ  
 お客さんがた、さっおいで

また図五はヨースト・アマン自画自刻の木版画の『西洋職人づくし』（1568年出版）から採った「毛皮職人」、「皮細工師」の絵図で、それにつけてある詩は同上書につけられたハンス・ザックス（1494～1576年）の作品である。ハンス・ザックスと言えば靴職人で自作歌手であり、兼ねて自作自演の狂言作家で詩人でもあった有名な人その人なのである<sup>16)</sup>。同上書には「皮なめし」などの絵図もあるが、本稿では省略した。次号以下で彼等と日本、長崎の皮革職人を比較検討してみるつもりであるが、その含みで上との関連でここに西洋の皮革職人の絵図を掲げた次第である。日本と異なると、彼等は差別、蔑視される所か寧ろ相当な社会的地位を得ていたと言われる。

因みに、長崎オランダ商館が輸入した諸種の皮革についてふれてみよう。商館が販売した鹿皮は日本鹿に似た種々の動物の皮（原皮でなく、なめしたもの）の総称で、シャム、カンボジア、タイワンから舶載した。武士の胴着、羽織、足袋、手袋、鉄砲を包む袋などに造り、鎧のおどしにも用いて、むしろ軍需品であった。輸入は寛永～万治年代（1624～60）が最盛期で、年に10万枚販売した事もあった。明暦2（1656）年の195,574枚が記録であった。寛永年代（1665～）に入るとタイワン、カンボジア鹿皮の輸入が止んだため、それ迄の輸入量の三分の一以下に減り、寛文7（1667）年以降はシャム鹿皮のみの輸入となったが、それも享保2（1717）年を最後として鹿皮の輸入は杜絶した。この間、シナ船がタイワン・カンボジア鹿皮を長崎に運んで売ったため、鹿皮がだぶついて値下りして問題となった事もあった<sup>17)</sup>。

鮫皮は日本近海に棲まない魚の皮で刀の柄や鞘を巻くのに適した種々の魚皮の総称であったようだが、これは鎖国以前から既に、ポルトガル船によって輸入されていた。オランダ人は「ロホの皮」といった。商い高は上記鹿皮よりは少なく、17世紀には通常3万枚前後、18世紀の20年代よりは2万枚足らず、40年代よりは1万枚を割り、特例的記録は寛永18（1641）年の80,596枚であった<sup>18)</sup>。

鮫皮はシャム、カンボジア、コロマンデル産で、17世紀の40年代はコロマンデル、シャム鮫皮がおよそ半々で商われたが、18世紀の10年代からコロマンデル産のみが輸入され、シャム産の輸入は中止された。その中止の時期はシャム鹿皮の輸入中止のそれとほぼ一致している。オランダ人は鹿皮同様、鮫皮も独占しようとはかったが鹿皮の場合と同じくシナ船の割込みに出会って悩まされた<sup>19)</sup>。

なお、牛皮の輸入もあった。シャム産で、多い年では5000枚程度の商いであったが、18世紀に入って、鹿皮、鮫皮同様、販売は中止され、その代りにジャワの水牛皮が輸入された<sup>20)</sup>。

また、染革も輸入された。染革は子牛・山羊などの皮をなめし、染色して模様をつけたもので、鎧のおどし、馬具などの飾り革、袋物などに用いた。ペルシャ、コロマンデル、スペイン、オランダ本国産色革を通常、3000枚前後商った。ペルシャのものは「はるしよ色革」と訳され、恒常的に最も多く舶載された。「阿蘭陀唐革」のうち、「金唐革」と訳されているものは四季の風景、ギリシャ神話のヘラクレスの英姿などを、なめし皮に金泥に彩色したもので、元禄初年から毎年、取引された。このほか、輸入品の中には、らくだ、ろばなどの皮の表面を粒に仕上げた粒起皮、子牛の皮をなめして着色したロシア皮というのもあった<sup>21)</sup>。

以上が長崎オランダ商館を経由した皮革輸入状況の概観であるが、皮革輸入に関する限りで言えば、その輸入は皮革の種類により多少の異同はあるにしても、17世紀前半がその最盛期、同世紀後半に相当かげりが見え、18世紀20年代以降落込み、衰退を見せて行ったと概言して大過ないのではあるまいか。筆者が皮革輸入に関して当面問題としている慶長三年以後にも亘って色々言及したのは、後に展開するであろう皮田町・毛皮屋町の盛衰や社会的評価にもそれは無関係ではないと考えるからである。後述の如く、上記両町の人達は慶安元（1648）年西坂、瀬崎へ、更に享保3（1718）年馬込にというように二度も強制移住させられるが、これらの時期はいずれも先に述べた皮革輸入のかげりの見えた時期、落込み、衰退して行く時期にほぼ前後していると筆者には思えてならないのである。勿論、皮革輸入の事のみで部落の強制移住、盛衰、社会的評価の変動を云々することは出来まいが、それにしてもそれと無関係だったとは言い切れぬのではなかるうか。ここでは行文の都合上、これ程の暗示程度に止めて置く事とする。

とも角、以上のような事でもあり、武具類を作れば売れ、輸入皮革の需要もある間は皮田町の職人、毛皮屋町の商人の生活は「苦しいものではなかった。特に皮革物による利益はかなり、いちじるしいもので、経済的にはかなりうるおう場合が多かったのである」<sup>22)</sup>。幕府解体期の世情を活写した好史料・武陽隠士著「世事見聞録」に江戸浅草の弾左衛門が三千石を越える身代を築き、近江国彦根の野良田村のえた頭才次、才兵衛は共に皮革業で、30、40万両の身上になり、大阪渡辺村の太鼓屋又兵衛は70万両程の分限で幕府の資金用達となつたと記されているのは<sup>23)</sup>江戸後期の、しかも他地方の際立った例だとしても、これによってある程度の推察はつけられようか。「雍州府志」貞享元（1684）年板本にも「其家富者多」とあり、滝川政次郎氏も江戸時代、穢多の人達が、「他の賤民に比して一般に豊かであったことは」「察せられる」と言っている<sup>24)</sup>。

磯本氏論文によると、皮屋町にも他町同様、乙名、組頭がもうけられ（役人村を兼務し、穢多目明と切支丹監視も命ぜられた）、また両町は皮革の目利を命ぜられて、寛永6（1629）年より「鹿皮目利」16名、寛文12（1635）年より「牛皮目利手伝」3名、延宝元（1672）年より「牛皮目利」3名（俸給はそれぞれ銀750匁、銀430目、銀750目）が明治の代まで代々11、12代に亘って世襲して出仕し、屋号として津ノ国屋、三根屋、泉屋、岩見屋などを残したことを考えると<sup>25)</sup>、両町の人々の豊かな生活ぶりがもっと身近に看得出来ようか。

以上のように段々に見てくれば、この頃、「特別な差別をうける事もなく」、社会的地位も「必ずしも低くはなかった」と言う事も読み取れるようである<sup>26)</sup>。先に見たように社会に皮革需要の向きが相当あり、一般に両町目利の人達が一般庶民同様に屋号を有し<sup>27)</sup>、長崎問屋の人達が長崎へ出張の際は町方の旅宿に宿泊した事<sup>28)</sup>などを考え合わせると、以上のように見えざるをえまい。〈未完〉

## 註

- 1) 『長崎市史 風俗篇』
- 2) 『物類称呼』安永4年。岩波文庫本 p. 28, 周知のように「日本諸国の方言を類聚した最初の著書」で、その集められた方言は「東日本が優勢である」が、「九州では長崎や薩摩が多い」ようである。以上の引用は岩波文庫本の解説や序よりの文章である事を断って置く。
- 3) 磯本恒信『長崎の風土と被差別部落史祖考』長崎県部落研究所
- 4) 『幕府時代の長崎』p. 8～9, 明治36年, 長崎市役所
- 5) 磯本恒信 前掲論文 p. 11
- 6) 磯本恒信 前掲論文
- 7) 部落問題研究所『部落問題研究二六輯別刑資料』「信州における近世部落の推移」。雄山閣『部落民の生活』駿河国今川氏関係の箇所。東京皮革青年会『皮革産業沿革史』上巻, 昭和34年, p. 51～p. 52
- 8) 磯本恒信 前提論文
- 9) 十部豊次郎『大阪西浜町の沿革と産業』『日本庶民生活史料集成』第14巻 31書房, p. 421
- 10) 十部豊次郎『大阪西浜町の沿革と産業』p. 421, 前掲論文, p. 1
- 11) 十部豊次郎『大阪西浜町の沿革と産業』, 前掲論文, p. 1
- 12) 磯本恒信, 前掲論文, p. 12
- 13) 『皮革産業沿革史』上巻, 前掲書, p. 68
- 14) 絵図も川原慶賀の生没も昭和55年, 西武美術館発行『川原慶賀展』を参照。尚, 原画は上の段(左よりヘラ・ヒノシコテ……サシカエシ), 中の段(左よりカ子ヘラ・ウチヌキ・ユビカワ…ナデヘテ), 下の段よりサイブチ・ハリサシ)がそれぞれ一枚の絵画になっているが, 参考図的なものに筆者が見立てている点や紀要刊行費の事などを筆者流に配慮して一枚の絵のようにした。
- 15) 日本古典全集刊行会『日本古典全集』昭和5年, 『人倫訓蒙図彙』p. 231, p. 287
- 16) ヨースト・アマン版, ハンス・ザックス詩『西洋職人づくし』1970年, 岩崎美術, 小野正重解説
- 17) 山脇梯二郎『長崎のオランダ商館』, 昭和55年, 中央公論社, p. 79～p. 80
- 18) 山脇梯二郎, 前掲書, p. 80～p. 81
- 19) 山脇梯二郎, 前掲書, p.81～82
- 20) 山脇梯二郎, 前掲書, p.82
- 21) 山脇梯二郎, 前掲書, p.82～p.83
- 22) 磯本恒信, 前掲論文
- 23) 武陽隠士『世事見聞録』, 日本庶民生活史料集成, 第8巻, p.745
- 24) 滝川政次郎『日本社会史』 昭和31年, 洋々社, p.339
- 25) 磯本恒信, 前掲論文, p.29
- 26) 磯本恒信, 前掲論文, p.13
- 27) 十部豊次郎, 前掲論文
- 28) 磯本恒信, 前掲論文, p.13

(昭和55年10月31日受理)